

時宗総本山清浄光寺所蔵史料にみる東国武将と時衆

皆川 義孝*

Kanto Military Commanders and Ji-sect in the Historical Records Possessed
by the Head temple Ji-sect Syoujoukou-ji

Yoshitaka MINAGAWA*

Abstract

This paper examines the documents possessed by the head temple Ji-sect Syoujoukou-ji, in order to discuss its exchanges with the Kanto military commanders, such as Mochiuji Ashikaga, Nobutora Takeda, Shingen Takeda, Yoshimoto Imagawa, Yoshishige Satake, and Yoshinisa Satake, who issued such documents. In this study, I aim to explore the possibility of clarifying the exchanges of the people and the things that were facilitated by the Buddhist temple based in the Kanto region.

This study is partially the result of a research called "Basic Research into the History of Exchanges in Buddhist Temples Based in Kanto in the Transition between the Medieval and Early Modern Periods Centered on Newly Discovered Historical Records from the Shojoko-ji Temple" that was performed through the Japan Society for Promotion of Science (JSPS)'s Grant-in-Aid for Scientific Research (c), No. 25370801.

はじめに

時宗総本山清浄光寺には、歴代の藤沢上人や遊行上人と天皇・將軍・各地の武將との交流の歴史に関する史料が多数現存する。現在、JSPS 科研費課題番号25370801 基盤研究(C)「清浄光寺新出史料を中心とした関東拠点寺院における中近世移行期交流史の基礎的研究」にて、清浄光寺より近年発見された中近世史料の調査を進めている。その成果については、平成二十五年「駒沢女子大学研究紀要」第二十号にて、特に室町幕府の第四代將軍足利義持が発給した二点の過所より、室町幕府と清浄光寺（藤沢道場）や京都金光寺（七条道場）との交流について紹介してきた。¹⁾

十五世紀中期以降の遊行上人の出身をみると、遊行十七代暉幽（二二九八～一四六六）は奥州二本松の畠山氏、十八代如象（一四一九～一四九四）は下野の聴野氏、二十一代知蓮（一四五九～一五一三）は上野の新田氏、二十二代意樂（一四六五～一五一八）は近江の上阪氏、二十三代称愚（一四七〇～一五二八）は山城の富樫氏、二十五代仏天（一四八七～一五七二）は奥州二本松の畠山氏、二十六代空達（一四八〇～一五三六）は信濃の島津氏、二十七代真寂（一五〇〇～一五四八）は越後の石川氏、二十八代遍円（一五〇九～一五五一）は奥州二本松の畠山氏、二十九代体光（一五〇一～一五六二）は奥州二本松の鹿子田氏（畠山氏分家）、三十一代同念（一五一八～一五八七）は日向の伊東氏、三十二代普光（一五四三～一六二六）は常陸の佐竹氏、三十三代満悟（一五三七～一六〇六）は越後の直江氏などである。²⁾ すなわち、室町時代から戦国時代の遊行上人の出身は、

各地の大名やそれに準ずる武士出身のことが多いことが指摘できる。

清浄光寺所蔵中世史料の中で東国武將に関するものをあげると、（年未詳）三月十日付『足利持氏書状』（天文十年（一五四一）か）極月五日付『武田信虎書状』、元亀二年（一五七二）七月十六日付『武田信玄寺領寄進状』（年未詳）十二月十三日付『今川義元書状』（年未詳）九月三日付『佐竹義重判物』（年未詳）正月八日付『佐竹義久書状』などがある。また東京大学史料編纂所の影写本の中に清浄光寺文書として、天正十七年（一五八九）九月十一日付『直江兼続過所』がある。³⁾ これらの史料は先に触れた遊行上人の出身との関わりで発給されたものも少なくない。

清浄光寺は、永正十年（一五一三）三浦義同と伊勢宗瑞（後の北条早雲）の戦いをうけて、ほぼ全焼する。この後、清浄光寺は三浦氏に協力していたため、小田原北条氏から再建を許されることなく、慶長十二年（一六〇七）遊行三十二代普光の代に至る迄の九十四年間、堂宇を再建することができなかった。⁴⁾ すなわち、中世後期から近世初頭の時期は、時衆や清浄光寺にとって危機的な時代であった。この間の東国武將と時衆との交流を今に伝えてくれる史料が、武田信虎、同信玄、今川義元、佐竹義重、同義久、直江兼続の発給文書である。

そこで本稿では、東国武將発給文書から見てくる、人とモノの交流史について探っていきたい。また直江兼続の過所を除き、すべて清浄光寺に原本史料が現存する。しかし、従来の自治体史等においては、すべて東京大学史料編纂所の影写本により、翻刻や研究が行われ、中には偽文書として見られてきたものもある。そこで今回、これらの原

本史料を紹介することは大変意義が大きいといえる。そこで、清浄光寺所蔵の原本史料については、それぞれの史料本文、読み下し、史料写真等をあげさせていただく。また史料翻刻にあたり、文字はすべて新字体に改めたことをお断りしておく。

一 鎌倉公方足利持氏との交流

中世における清浄光寺は、室町時代以降、鎌倉府より鶴岡八幡宮に並ぶ寺院として遇されてきた。第四代鎌倉公方の足利持氏（一三九八～一四三九）は、遊行十四代・藤沢八世の太空に深く帰依した。特に応永三十三年（一四二六）二月十四日に清浄光寺が火災で焼失し、永享七年（一四三五）十一月二十一日に持氏が百二十坪の仏殿を造営するなど、清浄光寺再建に対して援助している。こうした持氏と清浄光寺の関わりの根底には、持氏と太空の人的な交流があった。持氏は太空ばかりでなく、鎌倉の別願寺との親交も見られるなど、時衆を厚遇している。また、持氏の子、成氏（後の古河公方）も、太空に厚く帰依している。

太空は、応永十九年（一四一二）三月に遊行十一代藤沢六世自空の入寂に伴い、遊行十三代藤沢七世尊明より、遊行上人を相続した。その後、応永二十四年（一四一七）に尊明の入寂により、藤沢八世となった。この間、応永二十三年（一四一六）四月三日と、応永二十六年（一四一九）十月二十日に、室町幕府第四代將軍の足利義持から過所が出されるなど、室町幕府將軍との交流もみられた。

しかし、永享十一年（一四三九）の永享の乱で、持氏が自害し、成

氏が古河公方として古河に移転後、清浄光寺は外護者を失うこととなった。この後、清浄光寺は永正十年（一五一三）の三浦義同と伊勢早瑞の戦火を受け、堂舎をほぼ焼失し、以後九十四年間は遊行上人は藤沢上人として独住することが叶わず、さらに清浄光寺の堂舎再建もできない状態となっていく。このように、持氏をめぐる政治的動向は時衆や清浄光寺にとっても、その存在を大きく左右するものであったといえる。

史料一は、年未詳であるが、足利持氏が藤沢上人の太空に宛てた書状である。

史料一（年未詳）三月十日付『足利持氏書状』

奉雇光触寺申候

処、懇承候、満足候、重而

以覚阿弥陀仏、剩三種

送給候、恐悦候、何様以舌入

彼此可申候、委細者阿弥陀院

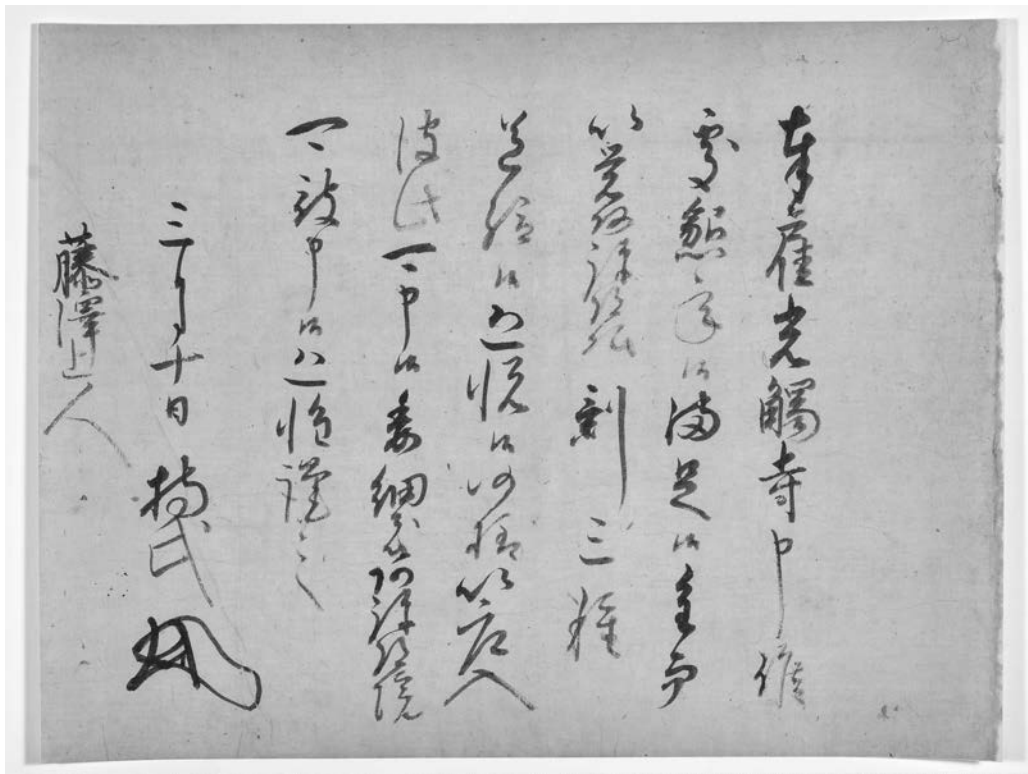
可被申候、恐惶謹言

三月十日 持氏（足利）（花押）

（太空）
藤沢上人

【読み下し】

雇い奉る光触寺申し候処、懇ろに承り候。満足に候。重ねて覚阿弥陀



史料一 (年未詳) 三月十日付 『足利持氏書状』 (法量：縦32.0cm×横42.0cm)

仏を以て、剩え三種送り給わり候。恐悦に候。何様、舌入を以て、彼此申すべく候。委細は阿弥陀院申さるべく候。恐惶謹言。

史料一は年未詳ではあるが、本史料の持氏花押は応永三十三年(一四二六)正月十六日に変更されたものとされ、その初見は同年七月二十六日付『鎌倉公方足利持氏御教書(長楽寺文書)』である^⑥。したがって、本史料は応永三十三年正月十六日以降に発給されたものと考えられる。

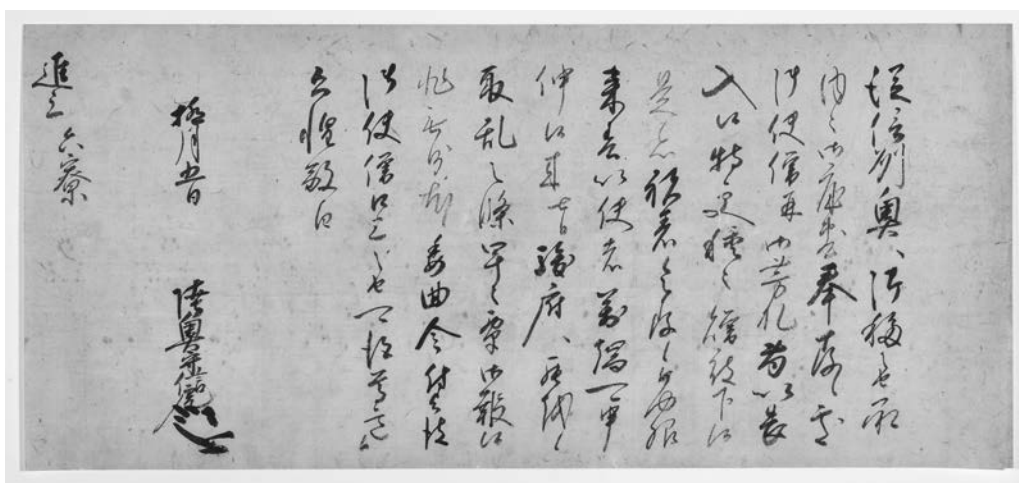
宛所の藤沢上人は、藤沢八世の太空である。また本文冒頭に出てくる「光触寺」とは、現在鎌倉市十二所七九三番地にある岩船山光触寺(清浄光寺末)のことである。もと真言宗であったが、弘安五年(一二八二)三月に一遍が結縁した後、時衆となった。

本史料で、持氏は光触寺の住職がいつていることに満足していること、また覚阿弥陀仏により届けられた三種の贈り物への礼を述べている。さらに、持氏は使僧の阿弥陀院よりいろいろなことを伝えるとしている。すなわち、本史料より持氏と太空の親密な関係を知ることができる。

二 武田氏・今川氏との交流

次に、戦国武将の武田氏や今川氏との交流について、みていきたい。

武田氏や今川氏との交流に関する史料が発給された時期は、清浄光寺が戦火で焼失し、堂舎の再建ができなかった時期にあたる。



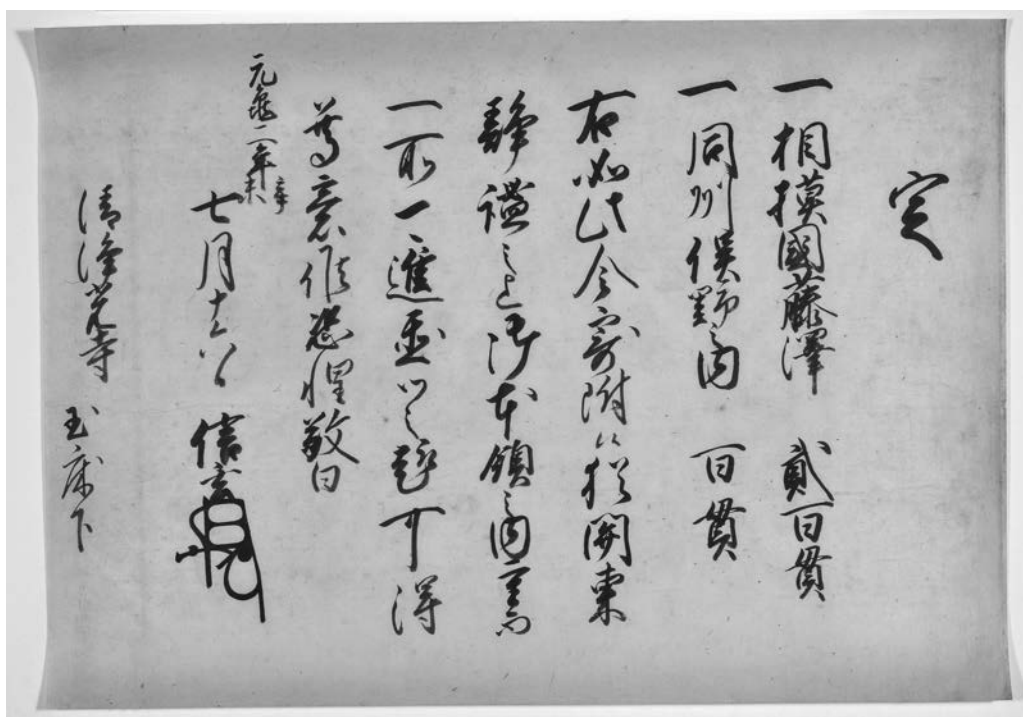
史料二 (天文十年か) 極月五日付 『武田信虎書状』 (法量：縦33.0cm×横48.0cm)

北条氏康は再建できない清浄光寺の跡地を、一〇〇〇貫文の奉加錢で買い上げ、それを家臣に与えることを企てたが、遊行二十九代の体光は、その采配をしていた玉繩城主北条左衛門大夫に永禄元年(一五五八)八月に書状を送り、それを阻止している。こうした体光の働きかけにより、永禄二年(一五五九)『小田原衆所領役帳』には「藤沢道場寺内」を遊行上人に寄進するとあるように、清浄光寺の跡地が失われることはなかった。こうした状況の中で発給されたのが、史料二から四である。

史料二 (天文十年か) 極月五日付 『武田信虎書状』

從信州奥へ御移之由承、
 内々御床敷奉存候処、
 御使僧并御芳札、苟以畏
 入候、特更種々贈被下候、
 是亦祝着令存候、如何様
 来春以使者、万端可申
 伸候、来七日駿府へ罷越候、
 取乱之条、早々覃御報候、
 非無沙汰候、委曲令付与彼
 御使僧口上之由、可得尊意候、
 恐惶敬白

(天文十年か)
 極月五日 陸奥守信虎(武田)
 (花押)



史料三 元龜二年七月十六日付 『武田信玄寺領寄進状』（法量：縦35.0cm×横49.0cm）

進上 六寮

【読み下し】

信州より奥へ御移りの由承り、内々御床敷く存じ奉り候処。御使僧ならびに御芳札荷に以て畏れ入り候。殊更に種々贈り下され候、是亦祝着に存じせしめ候。如何様来春使者を以て万端申し伸ぶべく候。来たる七日駿府へ罷り越し候、取り乱すの条、早々御報に亶び候。無沙汰に非ず候。委曲は彼の御使僧の口上に付与せしむの由、尊意を得べく候。恐惶敬白。

史料三 元龜二年七月十六日付 『武田信玄寺領寄進状』

定

一、相摸^(候)国藤沢 貳百貫

一、同州候野之内 百貫

右如此令寄附候、猶閑東

静謐之上、御本領之内、重而

一可進置候之趣、可得

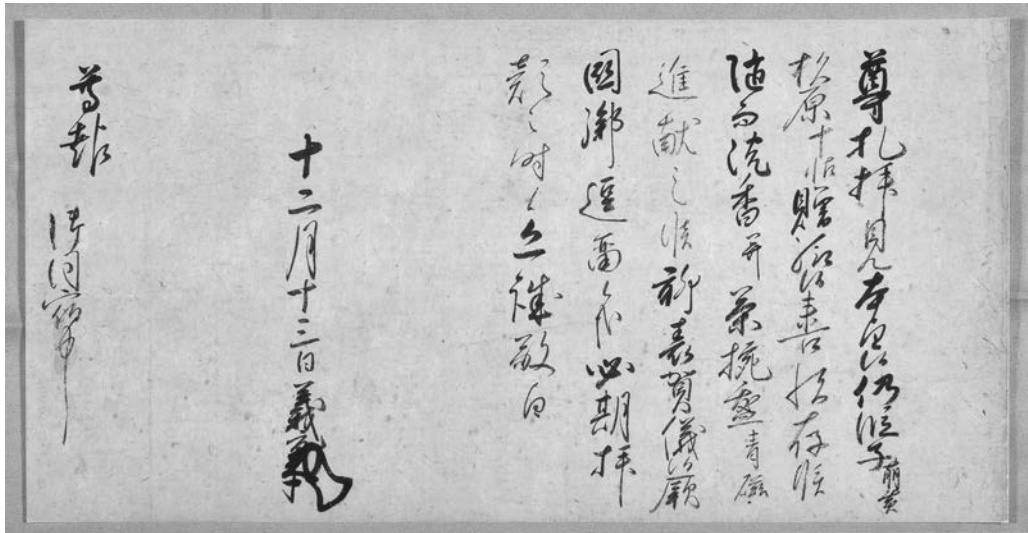
尊意候、恐惶敬白

元龜二年^{辛未}

七月十六日 信玄^(武田) (花押)

清浄光寺

玉床下



史料四 (年未詳) 十二月十三日付 『今川義元書状』 (法量：縦25.0cm×横50.0cm)

【読み下し】

定

一、相模国藤沢 貳百貫
一、同州侯野の内 百貫
右かくの如く寄附せしめ候。猶閑東静謐の上、御本領の内、重ねて一
所進らせ置くべき候の趣、尊意を得べく候。恐惶敬白。

史料四 (年未詳) 十二月十三日付 『今川義元書状』

尊札拝見本望候、仍（書）段子（萌黄）・

杉原（十帖）、贈給候、喜悦存候、

随而沈香（并）茶碗・盆（青磁）

進献之候、聊表賀儀候、厥

国御逗留候哉、必期拝

顔之時候、恐誠敬白

十二月十三日 義元（今川）（花押）

尊報

御同宿中

【読み下し】

尊札拝見本望に候。仍て緞子萌黄・杉原十帖、贈り給わり候。喜悦に
存じ候。したがって沈香ならびに茶碗・盆青磁、これを進献し候。聊
か賀儀を表わし候。その国に御逗留候哉。必ず拝顔の時を期し候。恐

誠敬白。

まず史料二は、武田信虎が六寮に宛てた書状である。また宛所の六寮とは、時衆内の役寮のことで、近世以降に称される四院（役寮）の桂光院寮にあたる。「藤沢六寮」（本稿史料六参照）の呼称もある。史料二の冒頭に信州から奥州へ移動して化益を行っていることから、この史料にある六寮とは、遊行上人に従って上人の諸事を管掌していた役寮のことであろう⁽⁸⁾。この当時、複数の遊行上人がおり、この六寮がどの遊行上人とともに活動していたかは、関連史料もなく不明である。

年未詳ではあるが、天文十年（一五四一）に発給されたものと思われる。ちなみに、本史料の信虎花押は大永五年（一五二五）以降に使用される花押であること⁽⁹⁾。「陸奥守」の受領名は、天文五年（一五三六）正月に受けている⁽⁹⁾。同年六月十四日、武田信虎は甲斐から娘婿今川義元のいる駿河に向かった。ところが、嫡子晴信（信玄）が国境を封鎖し、信虎が追放され、強制的に隠居させられた事件が発生する。この後、信虎は今川義元の元に寄寓することとなった⁽¹⁰⁾。同年九月二十三日、今川義元は武田晴信に対して、信虎の隠居料等について催促している⁽¹¹⁾。すなわち、史料二は信虎が甲斐を追放され今川氏に寄寓することになった半年後の書状と考えられる。

『白金叢書 遊行・藤沢歴代上人史―時宗七百年史―』（松秀寺一九八九年、以下『遊行・藤沢歴代上人史』と略す。）によれば、大永元年（一五二一）九月、信虎の懇望により、遊行二十四代不外を一条道場に招き、大永の乱戦没者の供養を行っている。このように、史

料二以前から信虎は時衆との交流がみられた。

本史料では、信虎が遊行上人から送られてきた書状と種々の贈答品への札が述べられている。次に十二月七日に駿府へ移るため取り乱しており、詳しいことは使僧が申し上げることなどを伝えている。このように、駿河に隠居後も信虎と遊行上人との交流が続けられている。

次に史料三である。元龜二年（一五七一）七月十六日に、武田信玄が清浄光寺に宛てた寺領寄進状である。これまで本史料の史料名は『武田信玄判物』とされてきたが、内容から『武田信玄寺領寄進状』とした。この史料が発給された元龜二年当時、清浄光寺はまだ再建のめどもたらず、厳しい状況にあった。こうした中、永禄十二年（一五六九）に武田信玄により、清浄光寺の周辺にあった小田原北条氏の支城とされる御幣砦が陥落する事件が発生した⁽¹²⁾。つまり、清浄光寺周辺の藤沢地域に武田氏の影響力が及んだのである。

では、史料三を見てみよう。史料三にて、武田信玄は清浄光寺に対して藤沢の地から二百貫文、俣野の地から百貫文、合計三百貫を寄進している。武田信玄は、たびたび小田原に遠征をしているが、この史料が発給された元龜二年七月段階に、藤沢・俣野周辺は武田信玄の勢力圏にあったことを示している。永禄二年（一五五九）の『小田原衆所領役帳』において、小田原北条氏が清浄光寺に寄進した土地は、十三貫七百二十六文⁽¹³⁾であったことと比較しても、信玄が清浄光寺を厚遇していた様子がうかがわれる。こうした信玄の態度の背景には、その父、信虎と遊行上人の親交が大きく影響しているように思われる。逆に、清浄光寺の側からすれば武田氏との親密な関係により、自らの

寺領を守ろうとした切実なる状況が窺われる。

最後に史料四であるが、発給年代と宛所は不明であるが、十二月十三日に今川義元が発給した書状である。宛所は具体的な記載がないが、遊行上人か、藤沢上人であろう。

『遊行・藤沢歴代上人史』によれば、遊行十四代太空の項で、駿河今川氏が太空に帰依し、その関係から「範政其阿、讃州法阿、伊与寛阿、駿河入道来阿、探題像阿」等が『時宗過去帳』に記載されたところ。このように、今川氏と時衆や清浄光寺との親交は、史料四以前から確認できる。また史料四が発給された背景には、史料二の武田信虎が駿河の地に隠居せられたことも関与していると思われる。

史料四の本文をみると、義元は遊行上人（または藤沢上人）から届けられた書状、萌黄の緞子・杉原紙に対して礼を述べている。ついで、上人の賀儀の祝いとして沈香・青磁の茶碗・盆を贈ることを伝え、最後に、後日の対面を約束している。関連史料もなく、それ以外のことは不明であるが、贈答の品々からしても、義元と上人の親密な関係が窺われる。

三 佐竹氏・直江氏との交流

近世初頭における清浄光寺再建において、重要な役割を果たしたのが常陸の佐竹氏である。またその関連で出てくるのが、越後の直江氏である。

ここで佐竹氏と時衆の関わりについてみておこう。正中元年（二三三四）に佐竹貞義が、その母・二階堂頼綱の娘の菩提を弔うため、

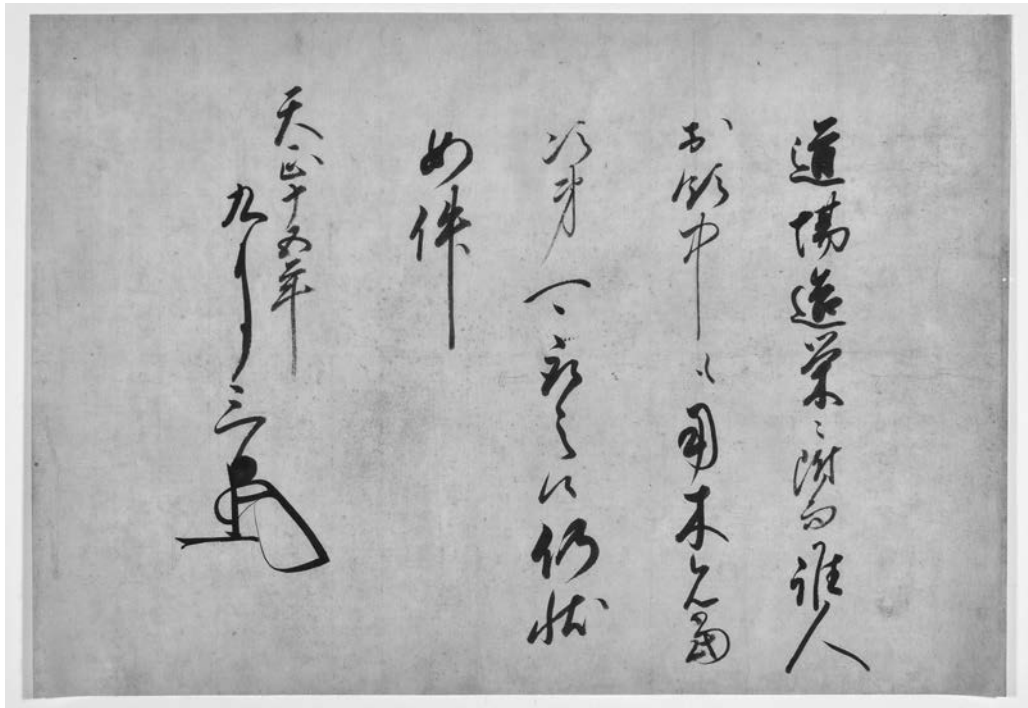
太田の浄光寺（現茨城県常陸太田市埴町二二三番地）を遊行四代呑海を開山として創建している。¹⁴『時宗過去帳』至徳四年（一三八七）七月二十三日条に、「重阿弥陀仏 佐竹家御白骨」とあり、佐竹家の重阿弥陀仏が清浄光寺に納骨している。¹⁵また天文七年（一五三八）に常陸国を遊行していた遊行二十七代真寂が、太田で佐竹義篤から歓待されているなど、佐竹氏と時衆は密接なつながりがあった。¹⁶

こうした佐竹氏と時衆の関係は、両者と小田原北条氏との対立関係で進展していく。文亀二年（一五〇二）頃、佐竹義舜が常陸北部の佐竹氏領国の統一を成し遂げる。こうした時、古河公方の足利政氏とその子高基が不和となっていた。永正三年（一五〇六）以降、高基は小田原の北条早雲と結び、政氏は佐竹氏などに援助を求めた。この結果、佐竹氏は北条氏と対立関係となっていく。他方、清浄光寺は、永正十年（一五一三）の三浦氏と北条氏の戦争に巻き込まれ、炎上して灰燼に帰した。清浄光寺は三浦氏に協力関係にあったことから、この戦いの後、北条氏は清浄光寺の再建を認めなかったのである。この結果、佐竹氏と清浄光寺は対北条勢力として、利害が一致していったのである。¹⁷

つぎに、佐竹氏と時衆の交流を示す史料五・六を紹介しておく。

史料五 天正十五年九月三日『佐竹義重判物』

道場造榮⁸二附而、誰人
於領中も用木見当



史料五 天正十五年九月三日付 『佐竹義重判物』(縦34.0cm×横49.0cm)

次第可取之候、仍状
如件

天正十五年

九月三日 (佐竹義重
(花押))

【読み下し】

道場造営に附て、誰人領中に於いても、用木見当次第、これを取るべく候。仍つて状、件の如し。

史料六 (年未詳) 正月八日付 『佐竹義久書状』

右、進置候御寺領之上^ニ

鹿嶋神向寺ニ式拾石之所、指

添進置候、後日為一筆ヲ以

申達候、恐々敬白

正月八日 義久^(佐竹)
(花押)

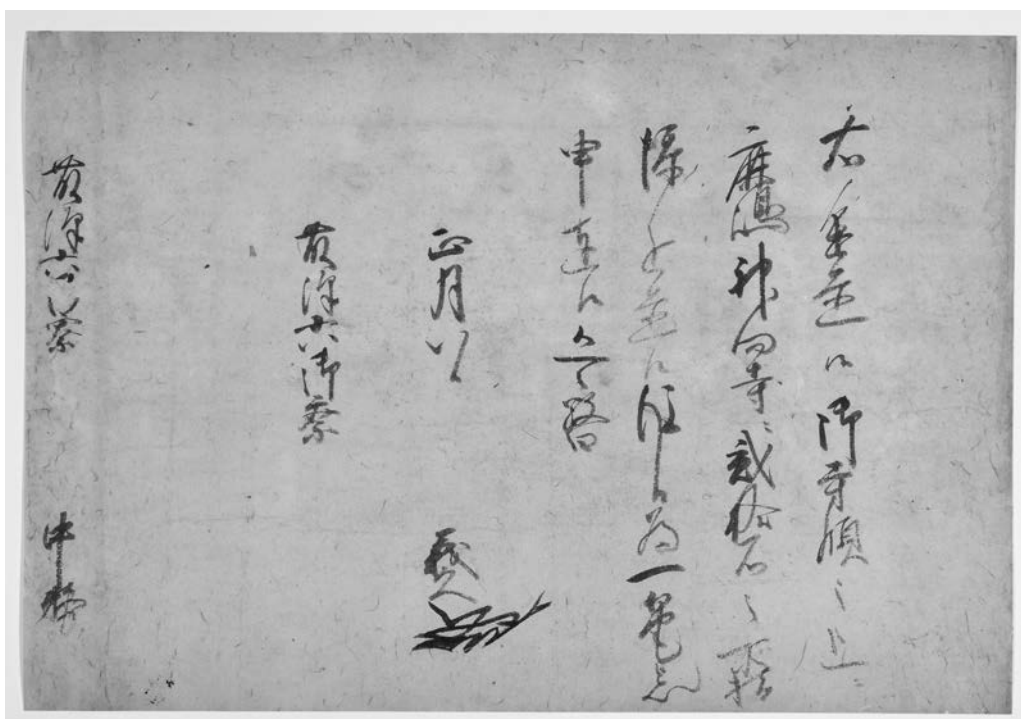
藤沢六御寮

〔封紙ウハ書〕
藤沢六御寮

中務

【読み下し】

右、進せ置き候御寺領の上に、鹿嶋神向寺に式拾石の所、指し添え進せ置き候。後日の為一筆を以て申し達し候。恐々敬白。



史料六 (年未詳) 正月八日付 『佐竹義久書状』(縦34.0cm×横49.5cm)

史料五は、天正十五年(一五八七)九月三日に、佐竹義重が遊行三十二代普光に宛てたもので、藤沢道場を常陸で再興させるための用木を、佐竹氏領国内から取ることを認めたものである。つまりは、佐竹氏領国内で大規模な堂宇を建設し、普光や時衆を迎える用意があることを示している。義重は、前年の天正十四年(一五六六)に隠居し、嫡男義宣が当主となっていた。また普光も天文十二年(一五四三)に佐竹氏の一族小野義高の三男として生まれた。天文十九年(一五五〇)八歳で、出家し、太田の浄光寺十三代其阿弥陀仏の弟子となった。其阿弥陀仏も佐竹一族であった。その後、遊行三十一代同念に従い各地を遊行し、天正十二年(一五八四)八月二十三日、日向の光照寺(現宮崎県西都市鹿野田五七六番地)で、同念より遊行を相続した。この当時の清浄光寺は、相模国藤沢の地は戦火で焼け落ちたまま復興されていなかった。この結果、同念や普光などの遊行上人は、各地を転々としていたのである。こうした中、天正十五年に普光は佐竹氏の当主から、その領国での清浄光寺(藤沢道場)の復興が約束されたのである。

天正十七年(一五八九)に普光は、越後にいた。同年に越後の専称寺(現新潟県柏崎市北条一一五四番地)にて遊行上人を満悟に譲り、同年九月に普光は越後を離れたのである。天正十七年九月七日には、越後の直江兼統が普光の帰国に際して、伝馬・宿送などが順調にいくための過所を発給している。さらに遊行二十三代となった満悟に対しても、兼統は同年九月十一日に過所を発給している¹⁸⁾。なお満悟は、直

江兼続の一族であった。

天正十八年（一五九〇）十二月、佐竹義宣が水戸城の江戸重通を滅ぼし、本拠を水戸城に移した。翌天正十九年（一五九一）、水戸城の西南、千波湖に面した高台に、水戸の藤沢道場を造営し、普光を迎えた。この後、義宣が寺領二百石、その家老、佐竹義久が寺領五十石、合計二百五十石を寄進している¹⁹。

しかし、天正十九年十一月、徳川家康より相模国藤沢の清浄光寺への百石の寺領寄進があり、同地での清浄光寺（藤沢道場）の復興がはじめられた。さらに、慶長七年（一六〇二）五月、佐竹氏の出羽国秋田転封により、普光と満悟は秋田移転ではなく、相模国藤沢での藤沢道場の復興を目指す。慶長八年（一六〇三）に伏見城で普光と満悟は家康に拝謁し、そして慶長十二年（一六〇七）普光は本山を水戸の藤沢道場から相模国の清浄光寺へ移し、近世の清浄光寺及び時衆の歴史が始まるのである。史料五は、こうした中世末期の清浄光寺や時衆の歴史にとって、大変貴重な史料といえる。

次に史料六である。年末詳であるが佐竹義久が、藤沢六寮に対して、鹿島の神向寺（現茨城県鹿嶋市神向寺一二五番地）に二十石を加増して寄進することを伝えたものである。正安二年（一三〇〇）に二祖真教がこの寺に逗留し、真言宗から時宗に改宗された歴史を持つ。史料六も佐竹氏による時衆寺院保護に関するものである。

おわりに

時宗総本山清浄光寺に現存している中世史料の中で、東国武将の発

給文書をもとに、中世後期から近世初頭にかけての東国武将と時衆や清浄光寺との交流について論究してきた。それぞれの史料から東国武将と時衆との親密なる交流の歴史を振り返ることができるものであったといえる。こうした東国武将と時衆との親密なる関係が形づくられた背景には、何があるのだろうか。

それには、遊行する時衆の性格が大きく関わっていたと思われる。戦国時代、各地の武将は厳しい社会を生き抜くために、領国内の経済力の向上や軍事力の増強の他、各地の情報の収集が不可欠であった。そうした武将にとって、諸国を遊行し、その実情に詳しい遊行上人は貴重な存在であったといえる²¹。さらに一族出身の遊行上人がいれば、それを保護したり、佐竹氏のように領国内にその拠点となる藤沢道場を造営することを画策させた大きな要因でもあったと考えられる。

今回は清浄光寺所蔵の東国武将に関する史料を中心に解説してきたが、清浄光寺には畠山卜山などの西国武将の発給文書もある。今後これらの史料も含め、更なる分析を進めていきたいと思う。

注

- （１） 遠山元浩・皆川義孝「時宗総本山清浄光寺所蔵史料について」『駒沢女子大学研究紀要』第二十号 二〇一三年）。この論文以降の調査によって、同論文で紹介した応永二十六年（一四一九）十月二十日付『室町將軍家御教書案』の写を清浄光寺にて発見した。その写は軸装されているが、軸裏に「東山 御教書」との墨書があり、もと京都の長樂寺（現京都市東山区円山町六二六番地）

に関するものと思われる。この写の史料性格などの詳細な報告については、今後の課題とさせていただきます。

- (2) 称宜田修然・高野修『白金叢書 遊行・藤沢歴代人史―時宗七百年史―』(松秀寺 一九八九年、以下『遊行・藤沢歴代人史』と略す)、今井雅晴『一遍と中世の時衆』(大蔵出版 二〇〇〇年)。
- (3) 『上越市史 別編2 上杉氏文書集2』(上越市 二〇〇四年) 所収三三二〇号。
- (4) 大橋俊雄『一遍と時宗教団』(第二刷 教育社歴史新書〈日本史 一七二 一九八五年〉、前掲注(1) 今井書等)。
- (5) 『藤沢市史 第四卷 通史編』(藤沢市役所 一九七二年)。
- (6) 佐藤博信「四 足利持氏の花押について」(日本古文書学会編『日本古文書学論集8 中世Ⅳ』(吉川弘文館 一九八七年)。
- (7) 前掲注(4) 大橋書、『戦国遺文 後北条氏編 別巻 小田原衆所領役帳』(東京堂出版 一九九八年、以下『小田原衆所領役帳』と略す)。
- (8) 六寮とは、時衆教団における「本寮」の一つであり、六つの寮で構成されていた。上位より、六寮(現在の四院の称では桂光院寮)、次に二寮(同、洞雲院寮)、一寮(同、興徳院)、三寮(同、東陽院寮)、四寮(現在に於ける二庵の称では常住庵)、五寮(同、等覚庵)となる。元々は別時念佛会における出座順である。
- (9) 柴辻俊六『戦国大名領の研究―甲斐武田氏領の展開』(第二刷 名著出版 一九九一年)、平山優『武田信玄』(歴史文化ライブラリー二二一 吉川弘文館 二〇〇六年)。
- (10) 前掲注(9) 平山書、柴辻俊六編『武田信虎のすべて』(新人物往来社 二〇〇七年)、『山梨県史 通史編2 中世』(山梨県 二〇〇七年)等。
- (11) (天文十年) 九月二十三日付『今川義元書状』(静岡県史 資料編7 中世三)〔静岡県 一九九四年〕所収一五六二号)。
- (12) 前掲注(5)。
- (13) 前掲注(7)『小田原衆所領役帳』。
- (14) 前掲注(1) 今井書。
- (15) 『時宗過去帳』(時宗教学部 一九六九年)。
- (16) 前掲注(1) 今井書。
- (17) 前掲注(1) 今井書、前掲注(4) 大橋書、『茨城県史 中世編』(茨城県 一九八七年)、佐々木倫朗『戦国期権力佐竹氏の研究』(思文閣出版 二〇一一年)。
- (18) 前掲注(3) 所収三三二〇号。現在、清浄光寺所蔵の中世文書の中には、天正十七年九月十一日付『直江兼統過書』の原本は確認できていない。この点について、『遊行・藤沢歴代人史』遊行三十二代・藤沢十三代普光の項には、「この書は京法国寺に在つてのち本山に納まったが、のち焼失する」との記載がある。現在、『直江兼統過書』の写は東京大学史料編纂所の影写本として残っている。明治十九年(一八八六) 三月に清浄光寺にて影写の作業が行われた。影写本には、過所の本文とともに、包紙とそれに書かれてあった文字が影写されている。包紙の写には、朱字にて、明治十七年(一八八四)に京都の法国寺から直江の過所などが、清浄

光寺に寄贈されたとある。したがって、この時、直江の過所は清浄光寺に移ったことが確認できる。さらに、包紙の文字を読むと、包紙の中には直江の過所とともに、豊臣秀吉の伝馬朱印状があったことが書かれてある。しかし秀吉の伝馬朱印の本文の写は確認できない。しかし、豊臣秀吉と時衆の関わりを知る上で貴重な史料があったことは重要な点と考えられる。この点は、今後の原本確認における貴重な情報である。

(19) 前掲注(17)と同じ。

(20) 前掲注(17)と同じ。

(21) 前掲注(17)と同じ。

本研究はJSPS科研費 基盤研究(C)課題番号25370801
「清浄光寺新出史料を中心とした関東拠点寺院における中近世移行期
交流史の基礎的研究」の研究成果の一部である。なお、本稿作成にあ
たり、鈴木努氏、滝澤雅史氏、長谷川幸一氏、林謙介氏にご教示を賜
りましたこと、ここに感謝申し上げます。